

2005 年度日本語教育実習 研究レポート

『『日本文化・日本事情』を初級クラスに取り入れる試み』

日本語文化専攻 日本語教育学講座

M2 越賀智映子

1. はじめに

本稿では、小川(2002)を参考に「日本文化・日本事情」という用語の範囲を次のように定義しておく。

「日本文化・日本事情」の範囲→日本の文化、社会、日本人の思想、習慣、行動規範、態度、マスメディアによる情報、うわさ、流行など

多くの社会言語学的、社会語用論的な研究が明らかにしてきたように、上述した要素は、その言語社会の規範が深く浸透しており、表現運用にも大きく関わってくるものである。コミュニケーションを行う上で、これらの規範や習慣が適切に扱われなければ、会話の参加者双方の間に誤解や摩擦を引き起こすことにも繋がる。ネウストプニー(1995)は、日本語が上手でも、日本の社会や文化について全く知らない外国人が日本人とコミュニケーションするのは困難であろうと指摘し、「社会文化教育のほとんどすべてがコミュニケーション教育にとって不可欠」であると述べている。つまり、教育現場において「社会文化教育」(本稿で言う「日本文化・日本事情」の教授)を無視したコミュニケーション教育は適切ではないと言える。では、日本語教育の現場で「日本文化・日本事情」について扱うとき、どのような素材をいかに取り入れていけば良いのか。本稿では「日本文化・日本事情」を授業に取り入れる試みとしてBクラス(初級)を対象に行った授業内容と、その成果や学習者の反応、また、そこから得られた反省点を報告する。

2. 日本文化・日本事情について

2.1 今までの取り組み

「日本文化・日本事情」を日本語教育の現場に取り入れる試みは国内外で多くなされ、その手法や成果についても多数報告されている。例えばトムソン木下(2002)は、シドニーの中級学習者を対象に、日本に関する研究テーマを与え、学習者に情報収集、発表、報告書作成等の作業をさせている。研究テーマは具体的には日本の「結婚」「食生活」「教育」「高齢化」等であり、最終的に初歩的な研究方法を身につけさせることを目標としている。他にも、中級学習者を対象に日本のアニメを鑑賞させ、その感想を聞くという方法をとった授業報告(船津 2000)、学部留学生に対して「日本文化を考える」ことをテーマに、講義、教科書の内容発表、日本映画やハリウッド映画の視聴、レポート作成等を総合的に実施し、学習者の「日本文化」への気付きを促した実践報告(梅木 2003)等がある。

これらの実践では、日本の伝統的習慣やサブカルチャーに関し、学習者の意見や感想を日本語で答えさせることを授業の主軸にしている。これには学習者側からの積極的な授業参加の姿勢と自発的な発言が不可欠であり、それを支えるのはある程度の日本語(会話)レベルであると言える。一方で、日本語を使って自分の意見を述べたり、抽象的な表現を使用

するレベルに達していない初級学習者に対しては、「日本文化・日本事情」を意識させる授業は、現在の所あまり見当たらないようである。

2.2 本実習での扱い

Bクラス(初級)において「日本文化・日本事情」を扱うにあたり、学習者のレディネスを考慮する必要がある。Bクラスに該当する学習者の情報を以下に示す。

【表1：Bクラス学習者のプロフィール】

学習者	国籍	性別	滞在期間	日本語学習歴
A	アメリカ	男性	6年	1年
B	アメリカ	男性	1年	なし
C	カナダ	女性	1年	8ヶ月
D	カナダ	女性	1年2ヶ月	なし
E	イギリス	男性	なし	9ヶ月
F	ニュージーランド	男性	2ヶ月	6ヶ月
G	アイルランド	男性	なし	1年3ヶ月

上記の内容を踏まえ、Bクラス運営の目標を次のように設定した。

- AETとして日本で生活する上で、最低限困らない程度の日本語教育を行う。
- 日本での生活を始める前段階として、何か役立つ情報を提供できる場を作る。

これらのことから、本実習のBクラスにおいて、多くの実践報告のように日本語を駆使した学習者主体の活動を行うことは現実的ではないと考える。特に来日直後の学習者にとっては、もっとローカルで実生活に密着した授業項目が必要になると言える。さらに、教育実習の時間的制約を考慮した場合、「日本文化・日本事情」の項目を授業の一部でコラム的に扱うことが妥当であると考えた。各授業項目は、実践やロールプレイによるタスク、クイズ、表現使用に関連するもの等、さまざまな方法によって実施した。

3. 授業の実施と結果

3.1 具体的な内容、方法

実際に授業に取り入れた項目を以下の表にまとめる。6日間のうち、筆者が直接実施した授業について取り上げる。該当するのは4日目を除く全ての授業である。また、実習生の担当時間や扱う項目の種類によって、授業に取り入れるタイミングや所要時間は常に一定ではなかった。

【表 2：実施した内容】

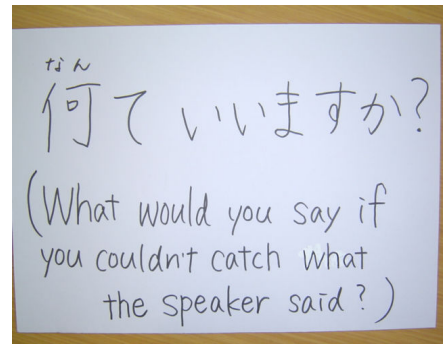
1 日目	2 日目	3 日目	5 日目	6 日目
ジェスチャー紹介。お辞儀・名刺交換を含めた自己紹介の実技練習。	本物の居酒屋のメニューを見る。注文のロールプレイ。	相手の言葉を聞き返す方法。誤解を招く聞き返し方の例。	既習の語によるワンフレーズ練習(「行きます」と「来ます」)。	日本の学校行事紹介。

以下、具体的な実施方法の説明をする。

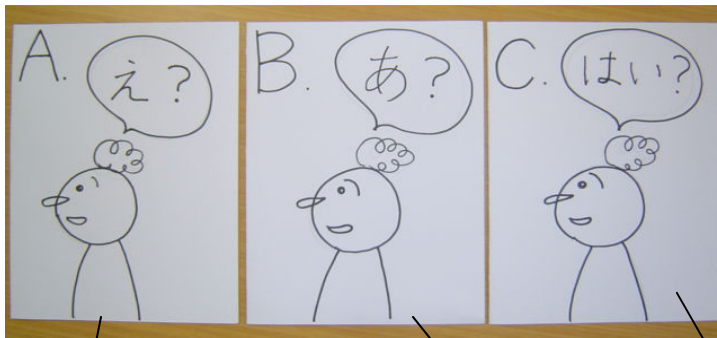
- 1 日目：日本人が用いるしぐさやジェスチャー(「断る、指きり、お金、お酒、恋人」を表現する)を紹介した。実際に教師がやって見せ、学習者もそれに倣い実践した。また、この日の最後の時間を利用し A クラス(ゼロ初級)の学習者、教師と合同で自己紹介の練習を行った。席を立ってお辞儀の練習を各自、その後ペアで行った。また、予め書いておいた 5~7 枚の名刺を使い、学習した自己紹介の会話例を基に、A クラスの学習者と教師に対してお辞儀、名刺を渡しながらの自己紹介を行った。
- 2 日目：居酒屋にグループで来て料理を注文するというロールプレイを行った。教師は店員として教室の入り口で人数を尋ね、席に案内し、メニューを渡し、注文を聞く。実際の居酒屋のメニュー(使用する許可を得たもの)を見ながら、料理の質問をしたり注文する品物と数を決めるタスクを行った。学習した会話例を基に学習者の意志で実際に欲しいものを注文するという、本物に近い活動ができた。
- 3 日目：相手の言葉が聞き取れなかった場合にどう聞き返すかを、3 択のクイズ形式で尋ねた。以下のようなイラストを用いて状況説明と質問を明示した後、正しいと思う答えを A「え?」、B「あ?」、C「はい?」の中から選ばせた。イラストを使用するのはその場の状況を簡潔に分かりやすく伝えるためである。誤解を招くような聞き方をした場合、解答に聞き手の気持ちを英語で提示し、なぜその答えが適切でないかを一目で把握できるように工夫した。状況はこの日扱った「道を尋ねる」場面で相手の説明が聞き取れないという、学習項目に関連するものを取り上げた。



【状況】右の人物が道を尋ねたが、相手の話が聞き取れず困っている(表)。

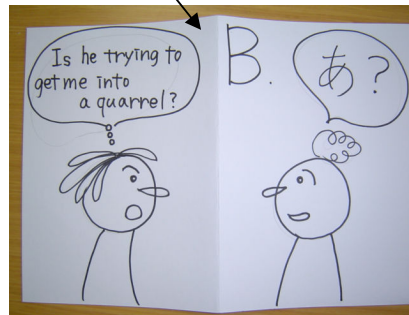
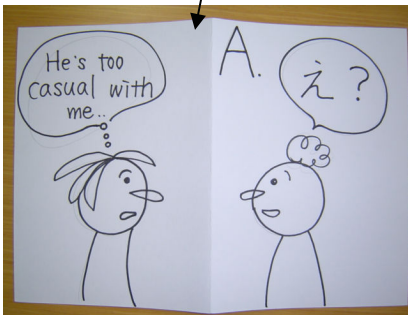


【問題】聞き返す場合、何と言えば適切か(裏)。



【選択肢】

提示したイラスト(四つ切り画用紙を二つに折ったもの)



【聞き手の反応と答え】折ってある部分を開く(各四つ切り画用紙)。正解はC。

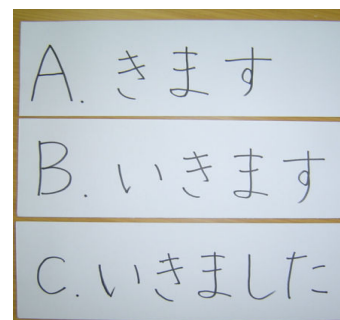
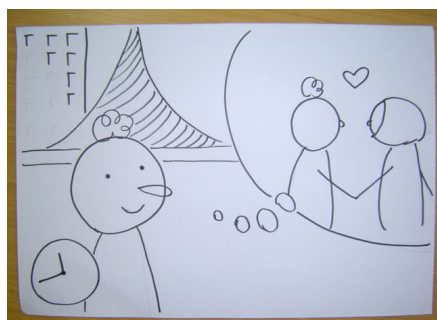
左側の人物の心情 : A 「He's too casual with me.(この人馴れ馴れしいなあ)」

: B 「Is he trying to get me into a quarrel?

(けんかを売っているのか?)」

5 日目 : 既習の動詞「行きます」と「来ます」を用いて、日本語と英語の使用方法の違い(I'm coming に対して「行きます」)に注目させる機会を作った。この日は主に動詞に焦点を置く内容であったので、既習の動詞でも使い方に誤用が見られ、定着しにくいと考えられるものを取り上げた。ここでもイラストを用いて状況説明をし、噴き出しに当てはまる表現を A 「きます」、B 「いきます」、C 「いきました」の中か

ら選択させた。



【状況】名古屋駅で待ち合わせをしているが、約束の時間になっても相手が来ない。電話をすると、相手はもう駅に着いており、待ち合わせ場所に向かっているという。

【選択肢】噴き出しに入るものを選ぶ。

6日目：日本の一般的な学校行事を、季節と関連させながら紹介した。時間的に余裕がなかったため、学校行事の紹介とその英訳のハンドアウトを用意し、主に教師が板書しながら、4月から順に紹介した。学習者に対し、自国の学校行事を質問する等の方法で進めた。

4. 結果

「日本文化・日本事情」の項目を授業で取り入れた結果得られた学習者の反応、教師側の反省点を挙げる。学習者の反応については、毎日行った授業後アンケートと、教師が観察した授業中の様子(発言内容、表情)を基にまとめる。

4.1 学習者の反応

4.1.1 アンケート結果から

6日間を通して行った授業後アンケート(記述形式)には、授業全体に関する質問に加え、別に「日本文化・日本事情」の項目について尋ねる部分が含まれる。ここでは、このアンケート調査から得られた結果を基に学習者が各授業をどのように評価しているかを見ていく。基本的に以下のような要領で①～③の簡単な質問を英語で行った。

【資料：授業後アンケート内「日本文化・日本事情」に関する質問の提示例(1日目)】

- About "bowing & giving business card practice, introduction to Japanese gestures"
- ① Do you think that contents you learnt is going to be useful to you in the future?
1) yes 2) no
 - ② Did you find any differences or similarities with your own country?
 - ③ Could you get an insight into manners, gestures and ways of thinking of the Japanese people? Please feel free to write impressions/what you thought.

このアンケートでは「About～」という形で、その日扱った項目を明確に意識させることができた。そのためほとんど毎日、学習者からの積極的な回答が得られた。

まず、①の質問では「扱った項目を将来使用したいと思うか」と尋ねた。これについては、回答された全ての結果で yes と評価されていた。

②の質問では、自国と日本との違いについて質問した。学習者が感じたことや率直な意見が出された。以下に回答された結果の一部を提示する。

《質問②に対する学習者の回答》

- Yes, the bowing is completely different from the US.(1 日目)
- I think Japanese people often understand western gestures from movies etc. so it's sometimes similar.(1 日目)
- Somewhat similar...except in New York City. No one would listen to you!(3 日目)
- It's very different I think.(5 日目)
- No major differences.(5 日目)
- There are differences compared to how you would say this in English.(5 日目)
- There a quite large differences in how many semesters per year and when the school year begins and ends.(6 日目)
- Both were completely different from Canada.(6 日目)

③では、取り上げた項目について感じたことを自由に書いてもらった。授業の感想以外に方法論的な意見も出された。以下に回答された一部を提示する。

《質問③に対する学習者の回答》

- It's all about respect.(1 日目)
- Japanese peoples words and actions when giving and receiving business cards is very polite.(1 日目)
- It is important to greet people correctly here.(1 日目)
- Yes, degrees of politeness are important in Japan I believe, bowing and self introduction are a very important part of this.(1 日目)
- This is hard in the classroom because it is not real situation. Perhaps a video would help.(1 日目)
- It was useful. I feel a bit more confident about going to new restaurant now!(2 日目)
- Very good efforts at practical exercises.(3 日目)
- Today was fun. It was a good class.(3 日目)
- Well done with exercises...(5 日目)
- The writing worked for me.(5 日目)
- Good exercises and pair work.(5 日目)

上述したように、アンケート結果から、「日本文化・日本事情」の項目に関して学習者個人によるさまざまな考えが見出された。①の質問結果からは、提供された情報が授業の素材として非常に適切であったと、学習者が評価していることが明らかになった。②、③の結果からは、日本人の習慣や日本的なポライトネスに関する意見、自国と比較した感想、授業の方法に関するアドバイスや要望等が見出された。この中で、日本人の習慣やポライトネスに関する考察は、授業中教師からは提供しなかったトピックである。しかし、「日本文化・日本事情」の項目を取り入れた結果、学習者が既に持っている日本に関する知識によって、新しい情報について自ら考え、新たに気付くことに役立ったと考えられる。

4.1.2 授業中の様子から

「日本文化・日本事情」を扱った際に確認された学習者の様子の中で、特徴的な事柄を、授業のビデオと、筆者の内省に基づいて記述する。

まず全体的に、「日本文化・日本事情」の時間帯は、クラスの雰囲気や和やかになり、学習者の表情が楽しげで明るくなったと指摘することができる。実践やクイズ形式の活動が多いため、特にクラスの中で日本語レベルが高くない学習者にとって緊張せず、リラックスして取り組めたようである。

上記のクラスの雰囲気という点に関して、教材として用いた擬似の名刺、居酒屋のメニュー等も、活動に対する学習者の参加意欲を高める効果を持っていたと言える。それらの教材が登場するだけで、学習者が興味を持ってタスクを行えたと考えられる。

教師が提示する情報や素材から、学習者自らが話題を発展させる場面も見られた。例えば、3日目の聞き返し方を尋ねるクイズで、教師側からは、イラストの登場人物がお互い「友だちではない」という情報を与えておいた。すると、ある学習者が「日本人が『え?』』というのを聞くが、友達じゃないから・・・(分からない)」という内容のことを英語で述べていた。これは3日目の活動でこちらが焦点を当てたいと考えていた点であった。相手が自分とどのような関係にある人物か、ということは日本語を適切に運用する上で重要な要素であるが、この学習者の発言によって、他の学習者にもこの点を気付いてもらえたのではないかと考えられる。また、2日目の授業中使用したパンダの人形について、「その人形は何歳か」という質問が出された。ここから、授業外ではあるが、日本や自国では何歳から飲酒できるかという話題が発展していった。このようなことから「日本文化・日本事情」の項目で取り上げた素材により、学習者に考えさせる機会を与えることができたと言える。

4.2 教師の評価、反省

上述したように、初級クラスにおいて「日本文化・日本事情」を取り扱うことは、学習者と教師にとって大変有意義であったと考えられる。ただ文化や習慣について取り上げられる素材は無制限に存在するので、今回の実習で扱う素材の選択が、最も時間のかかる作業であった。また、その扱い方も毎日異なっていた。反省点としては、取り上げる素材と

提示の仕方の吟味をもっと時間をかけて行うということである。

また、提示した情報をいかに展開させるか、それをどこに繋げるか、に関するシミュレーションが教師側でなされていなかった。

5. まとめ

本稿では初級クラスにおいて「日本文化・日本事情」を授業に取り入れる試みを報告した。これらはいくまでも、本実習のBクラス(初級)に対して行った結果であり、カリキュラムや学習者の種類が異なれば、当然さらに適切な方法が考えられる。しかし、今まで「日本文化・日本事情」を明確に意識した授業方法の報告が少ない中で、本稿のような実践報告により、特に初級の授業における応用が可能であることが明示できたと考えられる。

小川(2002)は「教師がどの知識を選び、どう扱うかということと、学習者個人を主体とするということは、二者択一的に対立するものではない」とし、教師が提供する「日本事情」を「素材」として利用することを提案している。ここでは教師は「素材提供者」という立場にある。本実習における試みも、決して学習者主体で行われた授業とは言えず、教師のリードによってさまざまなトピックが挙げられたが、上述したように、全日程において学習者からの反応は良かった。また、提供された素材から学習者自身が多く の点を考え、咀嚼し、自文化との比較を通して日本文化や日本の習慣について意識することが十分になされたと言ってよいと思う。

今後、その国の文化や社会習慣を扱う授業を言語教育の現場で実践していくことを考えた場合、学習者のニーズに合った方法の開発が求められる。そして教師自身が異文化と日本文化について考え、常に新鮮で普通の日本人の皮膚感覚を持つことを意識する必要があるようにも思う。以上のことを踏まえ、今回の実習により得られた成果や反省点を、今後の教育活動に反映させていきたい。

《参考文献》

- 梅木陽子(2003) 「『文化』について考える ―『日本文化』をテーマにした授業の実践報告―」 『日本語教育と異文化理解』第2号 愛知教育大学国際教育学会
- 小川小百合(2002) 「文化“知識”としての“日本事情”再考」 『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第4号 21世紀の「日本事情」編集委員会
- トムソン木下千尋(2002) 「海外の日本語教育における日本文化の学習を促すコースと教師の役割」 『21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第4号 21世紀の「日本事情」編集委員会
- ネウストプニーJ.W(1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- 船津明生(2000) 「授業のなかで日本文化・日本事情をどう教えてゆくか ―AET2000を終えて―」 『名古屋大学日本語教育実習レポート』